未知への挑戦

高山　博（西洋史学）

幼い頃の私が、大学で西洋中世史を教えている現在の私を見たらどう思うだろうか。夢がかなったと思うだろうか、それとも、自分が描いた人生と大きく違ったと思うだろうか。

私は、幼い頃から科学者になることを夢見ていた。科学百科事典に記された宇宙の構造や地球の構造、地球の歴史をわくわくしながら読み耽っていた。田舎育ちであったため、野山では、様々な植物、昆虫、鉱石を集めて、図鑑と比べていた。夜になると、空を眺めながら、宇宙飛行士になって星空を翔けたいと思った（しかし、後に、将来宇宙飛行士になりたいと語った時、中学校の先生からは「実現不可能な夢」と一笑にふされた）。野口英世、パスツール、牧野富太郎、ニュートン、アインシュタインなどの偉大な業績を残した科学者に憧れ、彼らの伝記を読みふけった。このような少年だったため、私は小学校・中学校を通して、理科が大好きだった。未知のことがらを知ることや謎を解明することが面白かったのだ。そして、それを一生の仕事にできる科学者に憧れていた。

しかし、私は、高校時代に入って、あっさりとこの夢を捨ててしまった。私の高校では、学生の進路の参考になるようにと、毎年卒業生を招いて彼らに自分たちの大学生活や仕事を語ってもらう講演会が催されていた。私が高校一年の時、講演者として京都大学理学部に進学していた先輩がやってきた。彼は、私の高校では抜群の成績を残して伝説化していた人物だった。刺激的な話を聞けると期待していた私たちの前で、彼は、大学での自分の悲惨な状況を語った。高校では誰にも負けない優秀な成績をあげ、自信をもって物理学者への道を目指していたのに、進学した大学での授業は全く理解することができず、完全な落ちこぼれになってしまったと言う。狭い社会での自分の能力を過信せず、もっと現実的に進路を考えるべきだと、在校生に忠告した。その話を聞いた私は、彼のように優秀な人間ですら落ちこぼれてしまうのなら、自分が優れた科学者になるのはとうてい無理だろうと確信した。こうして、あっさり科学者になる夢をあきらめ、文系に進路を変えたのである。

それから数年後、東京大学の文科三類に在籍していた私は、進学振り分けの時期を迎えた。幼いころ自然科学に惹かれた時と同じように、未知の世界を探求したい、誰も知らないことを解明したいという強い気持ちが変わらずあった。私は、いくつかの分野の中から、歴史学を選ぶことにした。多くの人は歴史を確定したものと誤解しているが、過去の世界や歴史は決して確定したものではない。過去は基本的に未知の世

界であり、人間の歴史も歴史家が作りあげたイメージにすぎない。私は、人類の歴史を自分自身で認識したいと思った。そして、歴史学を学ぶことに決め、西洋史学を専攻することにしたのである。西洋史の中でも、史料がほとんど知られていて議論が精緻化している古代ではなく、また、情報が豊富な近現代でもなく、解明されていないことが多い中世に惹かれていた。同時に、ヨーロッパ世界とイスラム世界の文化交流に興味があったため、両文化が接触していた中世スペインか中世シチリアの研究をしようと思った。この二つのうち、国際的に研究が進んでおらず、よくわからない点の多い中世シチリアを選ぶことにした。中世シチリアは謎が多く、確かに知的刺激に満ちた分野だったが、その研究には多くの言語が必要であり、予想外の苦労を強いられることになった。中世シチリアの研究を始めて 20 年以上が経過したが、その間に、中世ヨーロッパの国家の比較研究や、地中海三大文化圏の比較研究など、新たな未知のテーマへの挑戦を始め、現在にいたっている。

今まで歩んできた道を振り返ると、ある意味では、少年時代にもっていた夢を実現したのかも知れない。未知の分野を探求したい、研究を一生の仕事にしたい、という夢である。ただ、唯一後悔していることは、高校時代にその領域を転換したということである。未知の分野を探求するのは、刺激的だがつらい仕事でもある。しかし、自分自身が最も関心を持ち面白いと思えるテーマを選べば、その苦痛ははるかに小さくなる。また、長年の経験から、人間の能力には大きな幅があり、自分が興味あることに全力を尽くせば、かなりな程度、目標を達成できると確信するようになった。

今では、私が母校の講演に招かれる立場になったが、私のアドバイスは、あの先輩とはまったく逆のものだ。今、進路に迷っている 1 年生、２年生は、もし自分が興味を持っていることがあれば、まず、その実現に向かって全力で進んでほしい。もちろん、すべての人が成功することはできない。しかし、たとえ 100%夢がかなわなくとも、別の意味で当初の目標を果たせる可能性は高い。私自身は、高校時代に興味ある領域を捨てるという過ちを犯したが、大学時代から現在に至るまで、自分が興味を持ち面白いと思われるテーマに固執し続け、その結果、幼い頃や学生の頃には想像できなかった刺激的で楽しい世界を見ることができたと思う。自分の能力や自分が置かれた環境のために、すべての夢がかなうことはありえないし、そうならなかったときのリスクヘッジは常に考えておくべきだが、自分のエネルギーを夢の実現に集中させることのできる、一生のうちで最も贅沢な時間を大切に使ってほしい。

『進学ガイダンス　2005』東京大学文学部 2005 年　183-184 頁